

23 進行子宮頸癌に対するCDDP-Mitomycin C-Pepleomycinによる術前動注化学療法の有用性に関する検討

都立府中病院

光山 聡, 桑江千鶴子, 松尾みどり, 谷口義実, 梅木英紀, 多田雅人, 北田博大, 大塚晴久

【目的】当科では進行子宮頸癌(扁平上皮癌)に対し, 1992年よりCDDP-MMC-PEP三剤併用(PMP)による術前動注療法を施行している。今回この治療法の有用性を検討した。

【方法】92-94年に臨床進行期Ⅱ期以上の子宮頸部扁平上皮癌22例(75歳以下, PS<2)に対しCDDP:80~100mg/m², MMC:8mg/m², PEP:10mg/m²を選択的子宮動脈投与または内腸骨動脈投与にて2~3コース施行した。(平均2.1コース)

術後, Ⅱ期に対しては放射線療法を, Ⅲ期以上に対しては放射線療法および点滴化学療法を施行した。対象は, Ⅱ_a期:2例, Ⅱ_b期:6例, Ⅲ_b期:9例, Ⅳ_a期:3例, Ⅳ_b期:2例である。

【成績】各臨床進行期別の奏効率(PR+CR), 手術施行率, うち広汎子宮全摘術可能例の割合-()内に示す-, および摘出子宮標本の組織学的検索で残存(-)の症例数は, 下記の通りである。

	PR+CR	手術施行率	残存(-)
Ⅱ _a 期:	100%	100%(100%)	0例
Ⅱ _b 期:	83%	100%(100%)	1例
Ⅲ _b 期:	89%	89%(75%)	1例
Ⅳ _a 期:	67%	67%(50%)	1例
Ⅳ _b 期:	50%	50%(0%)	1例

またsurgical marginはすべての症例でCa(-)であった。Ⅲ_b期以上の残存(-)例は, すべて不完全手術例であったが, 再発を認めていない。(無病期は, Ⅳ_b期例で2.2年)死亡例は, 手術不能例で癌死1例(Ⅲ_b期), 施行例にて癌死1例(Ⅱ_b期)他病死1例(Ⅲ_b期)であった。

【結論】PMP三剤併用動注療法は, 高い奏効率が得られ, 子宮頸部扁平上皮癌に対する有用性が認められた。

24 子宮頸癌領域リンパ節転移症例の臨床病理学的検討-その術後追加治療法の選択のために-

兵庫県立成人病センター

山崎正明, 北川勝, 川口真衣子, 東田太郎, 西村隆一郎, 大津文子, 武内久仁生, 長谷川和男

〔目的〕子宮頸癌の領域リンパ節転移例の予後改善のため, 術後追加治療法選択に際して有用な情報を得ることを目的とした。〔方法〕対象は広汎性子宮全摘を行ったⅠ_b, Ⅱ期555例(転移例114例, 非転移例441例)で, 臨床進行期, 組織型別の転移率を比較し, さらに転移例について組織型や転移部位数別にその予後を検討した。〔成績〕臨床進行期別の領域リンパ節転移率はⅠ_b期13.4%(49/366), Ⅱ_a期17.1%(12/70), Ⅱ_b期44.5%(53/119)であった。組織型別の転移率は角化型25.5%(13/51), 大細胞非角化型19.1%(69/362), 小細胞非角化型26.1%(18/69), 腺癌(腺癌・扁平上皮癌混合型を含む)19.2%(14/73)で, 組織型による有意差を認めなかった。転移例の組織型別の予後の比較では, 小細胞非角化型、腺癌が他型に比して予後不良の傾向を示した。次に転移部位数別の予後の比較では, 1, 2部位群の5年無再発率はそれぞれ60.1%, 45.6%であったが, 3部位以上の群は13.4%と有意に低率であった。再発部位をみると, 転移例では遠隔再発の頻度が36%(41/114)と極めて高率で, これを組織型別にみると, 小細胞非角化型では遠隔再発が72.2%と他型に比べて特に高率であった。一方, 腺癌では骨盤内再発も28.6%みられ, 他型と比較して再発部位の分布に若干の差がみられた。転移部位数と再発部位との関係では, 遠隔再発は1, 2部位群でそれぞれ27.1%, 34.4%に対して, 3部位以上の群は50%となっていた。〔結論〕小細胞非角化型の転移例あるいは組織型に関わらず転移部位数の多い症例は遠隔再発の頻度が高く, 今後これら症例の予後改善のためには術後照射の範囲を傍大動脈節領域まで広げたり, 強力な全身化学療法を行う必要があると考えられた。